

閉会の辞

日本語教育センター副センター長
経済学部教授
小林 純 氏



○**金庭** 先生方、どうもありがとうございました。それでは、これより閉会のご挨拶に移ります。閉会のご挨拶は、日本語教育センター副センター長、経済学部教授、小林純先生よりちょうだいいたします。小林先生、よろしく願いいたします。

○**小林** 長時間にわたりご参加ありがとうございました。突然、主催者の顔をして出てまいりました。一番最後に長尾先生が言われたことは「ずる」でありまして、パワーポイントの最後にあれが出てきたときには、私はずるいよと思ったわけですね。すなわち、評価というのはぎりぎりのところ、判断材料をいかに論理的に意味あるものとして、すなわち主体的構成をもって提示できるかという話だと思ふのです。物事を量的に評価し判断するというのは簡単でして、数字で並べれば、大きなほうがいいのだという論理にのせれば済むわけです。私は経済学ですから、非情にも最適値がどこだとか、すぐ計算にのせるのです。評価というのも、基本的に最後はそうなるだろうと思ふのです。ところが、2つの異なった目的のために特定の資源を振り分ける場合、これは別の判断が必要ですよ。例えば、喉が乾いているから飲み物を用意するのか、寒いから衣服を用意するのか。どちらにするか。これは先の評価ではだめなのですね。判断なのですね。こういう領域で、恐らくは評価学という新たな、私に言わせれば形式論理の展開だと思ふのですが、それが、例えば、教育行政であるとか、さまざまなところに使われていくのだろうと思っています。まさに超領域といえますか、新領域の形成だと思ひます。

その宣伝に來られたのかなと、初め聞いていて思っていたのです。そうしたら、

最後にマンデラではないですか。ずるいですよね。まさにああいうファクターを我々は持っていて、教育という現場で仕事をしている人間ですから、腑に落ちてしまうわけです。ぎりぎり心に抱いているものと、職場で使わなければいけない衣装、袴の微妙なずれを、あの1枚のスライドでボンと言ってしまったのですよね。だから、ずるいよと思ってずっと聞いていたのですが、やはり最後にお話をそこに持っていかれた。この人は教育者なのだと。私はホッとしております。

そういうことを我々は不断に感じながらやっていくわけです。私は、実は日本語教育、言語教育とは全く縁のない人間でありまして、唯一、語学学校で言葉を習った。あとは、母国語と外国人、半分ずつ200人の大きな寮にボンと入るという世界で1年暮らしたことがあります。1学期目はアメリカ人と相部屋、2学期目はシングルの部屋に入って、隣はユーゴスラビアの本物のお姫様。そういう世界でした。ですから、そういうときは留学生という感覚はないのですよ。そして、どのコースのどの言語教育が私にとって有益であったかということも、もうどうでもよくなる。一番重要だったのは、学部3年のときに、辞書を片手に半ページ読むのに半日以上かけてノートを取って読んだことか。そういう読みも大事だったし、語学学校で先生がチイチイパッパやってくれて、それで音を一生懸命聞いたことも大事でした。どれがいいかというのは分からないし、先ほど池田先生がおっしゃったように、いわゆるセグメント評価ではないですけども、どこがということではなく、結果としてそれが1つのものになって使えて、まさにハートに届けられるような世界になればいいわけですよ。そうしますと、評価ではなく、マンデラの言葉に行き着くわけですよ。

ところが、そういう中で、私たちはトップが留学生2,000人と言ってしまったとか、1億何千万円のお金を取らなければならないとか、そういう現場でのしんどさ、組織人としての面倒くささに付き合いつつ働いているわけです。ですから、そういう職場で、そのある種、ぎりぎり詰めていけばジレンマというものがあると思いますが、そういうものを抱えながら、では、まわりを巻き込み、そのことがお互いにメリットがあり、そして教育を受けるその本人にメリットがあるように己の態度を修正する場はどこなのだと。その場の特定、アイデンティファイすべき場をきちんと探すときに、この評価学が技術として使えるのではありませんか。私はそういう主体的総括をやってみました。皆さんはそれぞれ別の、皆様のコンテキストで何かしら学んだことと思います。そういう意味で、皆さんのハー

トに何か届くようなシンポジウムであつたらいいなと思いますが、そうあつたでしょうか。終わります。ありがとうございました。

○**金庭** 小林先生、ありがとうございました。これをもちまして本日のシンポジウムを終了させていただきます。本日は長時間にわたりまして、ご静聴いただき誠にありがとうございました。先ほどお配りしておりますアンケートですけれども、入り口付近に係の者がおりますので、ぜひご記入いただきまして、出していただけましたら幸いです。

では、お手荷物をご確認の上、お忘れ物のないようにご退場ください。この部屋ですけれども、すぐに閉めさせていただきますので、よろしく願いいたします。本日はありがとうございました。